



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語オノマトペの形態的特徴
Author(s)	サディグル, エルドス
Citation	国語国文研究, 136, 84(1)-73(12)
Issue Date	2009-07-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93271
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_136-84-73.pdf



日本語オノマトペの形態的特徴

サディグル・エルドス

1. 初めに

オノマトペ (onomatopoeia) が言語表現において示す特徴は、一般の語彙と異なっており、音と意味の間に有縁性が見られることである。こうしたオノマトペにおいては、表す対象による下位分類が可能であり、形態的特徴の分析に効果的であると考えられる。一般的には、動物の鳴き声と人間の声を表す語は「擬声語」、自然界の音を表す語は「擬音語」、自然界の物や人間と動物の動作や様子を表す語は「擬態語」、人間の心の状態と感覚を表す語は「擬情語」と呼ばれている (Chang 2000; 飛田・浅田 2002 など)。

本論では、日本語オノマトペを音韻・形態的な側面から考察し、一般語彙と区別されるオノマトペ語彙のみに見られる特徴 (オノマトペ標識) を指摘する。また、その特徴は擬声語・擬音語・擬態語・擬情語においてはどのように出現するかを明らかにし、これに関して下位類のそれぞれの間には大きな相違が存在することを示す。

2. データベース

日本語オノマトペのデータベースとして Kakehi, Tamori and Schourup (1996) を選び、見出し語 1,591 の項目を対象として分析を行った。データベースでは、擬音語を S (sound)、擬態語を M (manner) と表示し、それぞれに複数の用法がある場合には S1、S2、M1、M2、などの略示して区別している。本研究では、この2大区分それぞれをさらに2つに分類した。S (sound) で表示しているものを「擬声語」と「擬音語」に分けた。前者は人間・動物の声と鳴き声、後者は自然界の音を表すものである。また M (manner) で表示しているものを「擬態語」と「擬情語」に分けた。前者は外界のものと人間などの動作や状態の様子、後者は人間の感情・感覚を表すものである。

しかしながら、データベースにおいては、以下の例が示しているように、(1) 1つの形式が1つのみの語義を持つ語、(2) 1つの形式が2つ以上の語義を持つが、それは同一の下位類に属する語、(3) 1つの形式が2つ以上の語義を持つが、それは複数の下位類に属する語、の3種類が見られる。

- (1) a. basha-basha

- S: A repeated splashing sound involving much spray.
- b. noshi-noshi
M: The manner of walking heavily.
- (2) a. bachi-bachi
S 1: A loud slapping sound.
S 2: A crackling sound of burning wood, static electricity, etc.
- b. bero-bero
M 1: The manner of licking, or sticking the tongue out, repeatedly with large movements. It often connotes eagerness.
M 2: The state of being thoroughly intoxicated.
- (3) huri-buri
S: The sound made when breaking wind loudly or repeatedly.
M: The manner of expressing extreme anger; the state of being extremely angry.

こうした中で、この三種類の語彙をどのように分析すると、より客観的な下位類の語数が得られるのであろうか。(1)と(2)に属するオノマトベは下位類によって分析しやすいが、(3)に属するオノマトベは「擬音+擬態」などの意味上での組み合わせの種であるため、擬音語として分析して数えるか、擬態語として分析して数えるかという問題が生じる。(3)の場合は、1つの形式が擬音の意味も、擬態の意味も持つため、このようなオノマトベを擬音語としても、擬態語としても数えることにする。

このように、日本語オノマトベ 1,591 を擬声語・擬音語・擬態語・擬情語に分析した結果、表1のような結果が得られた。

表1 日本語オノマトベの下位類の語数

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
語 数	144	659	1,040	129
1 モーラ「CV」	115(80%)	158(24%)	149(14%)	32(25%)
2 モーラ「CVCV」	26(18%)	488(74%)	871(84%)	93(72%)
例 外	3(2%)	13(2%)	20(2%)	4(3%)

3. 日本語オノマトベの派生過程における標識

本節では、日本語オノマトベの派生過程における標識について述べる。ここでは、「派生の過程」とは、促音/Q/、撥音/N/などの「オノマトベ標識」を語基に付け加えたり、語基を反復したりすることなどを指している。「オノマトベ標識」とはオノマトベ語彙に規則的に見られる音韻・形態素の特徴を示すものとする。

「オノマトベ標識」(onomatopoeic marker) という用語は、Waida (1984) が最初

に用いたものと考えられる。Waida (1984) の定義では、促音/Q/・撥音/N/・母音の長音化/R/・/ri/・反復がオノマトペ標識に含まれている。以下では、これらの標識がオノマトペの下位類にどのように出現するかを考察する。ここで具体的に、2 モーラの「ばた」を例にとって、語基からの派生過程を示す。「ばた」という語基を持つオノマトペにも複数の意味があるが、ここでは「平らな板状のものが打ち当たったり、倒れたり、落ちたりする音・様子」という意味の語基からの派生形を表示する。

表 2 語基「ばた」からの派生形

№	オノマトペ	派 生 形	標 識
1	ばたっ	CVCVQ	Q
2	ばたん	CVCVN	N
3	ばたり	CVCVri	ri
4	ばたっ	CVCVRQ	R、Q
5	ばたーん	CVCVRN	R、N
6	ばったり	CVQCVri	Q、ri
7	ばったん	CVQCVN	Q、N
8	ばたばた	CVCVCVCV	反復
9	ばたばたっ	CVCVCVCVQ	反復、Q
10	ばたばたっ	CVCVCVCVRQ	反復、R、Q
11	ばたんばたん	CVCVNCVCVN	N、反復
12	ばたりばたり	CVCVriCVCVri	ri、反復
13	ばったりばったり	CVQCVriCVQCVri	Q、ri、反復
14	ばったんばったん	CVQCVNVCVQCVN	Q、N、反復

上の表から窺えるように、「ばた」という語基に/Q/・N/・ri/などが加わって、初めて完全な語彙形式となる。このことから、2 モーラの語基を持つオノマトペの派生過程においては、/Q/・N/・ri/・R/・反復という標識が用いられると分かる。以下では、これらについて考察を行なう。

4. 語頭要素

本節では、日本語オノマトペ語彙の「語頭要素」について論じる。日本語オノマトペにおいては、以上で示したオノマトペの派生過程における標識以外に、いわゆる語頭要素が観察される。この「語頭要素」という範疇は、先行研究では深く議論の対象となっていなかったものである。これについて最初に議論したのは角岡 (2003) である。角岡 (2003) は/u-huQ/、/a-ha-ha/、/aQ-haQ-ha/などの語を取り上げ、語基の/hu/と/ha/の前で現れる/u/と/a/を接頭辞として扱っている。また、このような接頭辞が、笑い声や鳴き声、動物の鳴き声を表す擬声語に限定され、語頭要素となっている音節

の母音と語基の母音が同一であるという点が特徴的であると述べている。

角岡 (2003) が指摘している語頭要素以外に、「うえーん」「うおーん」「おぎゃー」で見られる「う」「お」などがある。これらは語基の中の母音とは一致しない母音から成る。この「う」「お」は語基の一部ではなく、語基に付加する語頭要素であることは「うえーん」「うおーん」「おぎゃー」に語頭要素のない同じ意味の形態の「えーん」「おーん」「ぎゃー」、またはその反復形の「えーんえーん」「おーんおーん」「ぎゃーぎゃー」が存在することから分かつ。

日本語オノマトペ 1,591 語を考察した結果、語頭要素がついた語彙は、擬声語のみにもられ、19 語しか得られなかった (例(4))。日本語における語頭要素付のオノマトペが特定の範疇の語彙に限定される点が興味深い。

- (4) aha-ha、aha-aha、aQha-aQha、aQ-haQ-haR、aQ-haQ-haQ-haQ、uhu、
uhu-hu、ehe-he、ihi-hi、oho-ho-ho、waha-ha、waQ-haQ-haQ、ueRN、uoRQ、
uoRN、uoR-uoR、uwaRN、ogyaR、ogyaR-ogyaR

5. 語末に起こる促音/Q/・撥音/N/・/ri/標識

本節では、オノマトペ語彙の語末に起こる/Q/・/N/・/ri/について議論する。オノマトペの語末におこるこれらの標識は、よく日本語オノマトペ特有の特徴として指摘されている (田守・スコウラップ 1999; Hamano 1986)。田守・スコウラップ (1999) が、オノマトペに用いられる/Q/は「急な終わり方」「スピード感」「瞬間性」を表し、一般語彙の「すごい」などで用いられる「強調」を表す/Q/と区別されていると述べている。また、オノマトペに用いられる/N/は、「ばん」「ぼん」「かん」などのオノマトペの語末に起こり、一般語彙にみられない「共鳴」といった意味を表すと示している。/ri/は「完了」「ゆったりした感じ」を表すと述べている (田守・スコウラップ 1999: 28)。

このように、先行研究ではオノマトペの語末の/Q/・/N/・/ri/標識が一般語彙から区別され、日本語オノマトペの特徴と認定されている。しかしながら、これらの/Q/・/N/・/ri/標識がオノマトペ下位類においてはどのような頻度で用いられているかについては先行研究では議論されていない。

考察の対象としては 1 モーラ「CVQ」「CVN」「CVRQ」「CVRN」のオノマトペと 2 モーラ「CVCVQ」「CVCVN」「CVCVri」「CVQCVRi」「CVNCVRi」「CVQCVN」「CVCVRQ」「CVCVRN」のオノマトペについて考察を行なった。その結果、表 3 が表示しているような結果が得られた。

表3 語末に起こる/Q/・/N/・/ri/の語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
/Q/	38(26%)	142(21%)	232(22%)	30(23%)
/N/	24(17%)	202(31%)	124(12%)	26(20%)
/ri/	1(0.7%)	84(13%)	252(24%)	17(13%)

この表の割合をグラフで表示すると、その相違点がより分かりやすくなる。

図1 /Q/・/N/・/ri/を伴う日本語オノマトベの割合

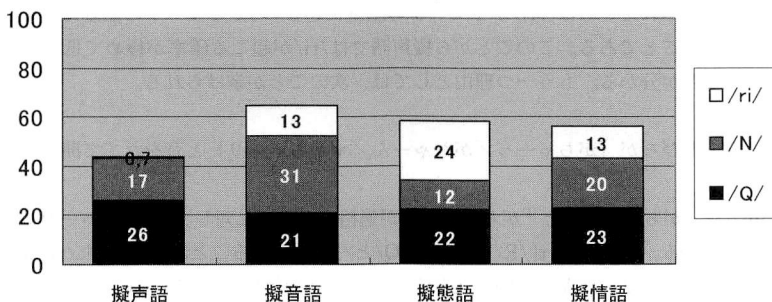


図1から、擬音語・擬態語・擬情語は語末標識を伴う比率がほぼ同様で6割程度であるが、擬声語はその比率が最も低い(約4割)ということが明らかである。/Q/に関する比率は、擬音語・擬態語・擬情語がほぼ同様であり、約22%を占めているのに対し、擬声語は26%にのぼる。/N/の場合は、擬音語は最も高い比率をみせ、31%を占めるが、擬態語は最も低くて12%である。また、/ri/に関する相違が興味深い。擬態語は24%に至るのに対し、擬声語は/ri/を伴わない傾向にある。

最初に、/Q/について検討する。日本語の促音は「無声声門閉鎖音」であり、発音されると口腔内で完全な閉鎖がおこって一瞬で気流が止まるため音の突然の停止が起こる。そのため無声閉鎖音の前の母音が短音化され、短く切り取られたような終わり方をする印象を与えると考えられているのである。以上の結果から、このような意味を表す/Q/は「おぎゃーっと叫んだ」「びっという音がした」「ころっと動いた」「かっと怒った」のようにすべての下位類のオノマトベに起こることが分かる。

しかしながら、/N/の用法に関しては下位類には相違点がみられ、/N/が擬音語に高い頻度で出現することが分かる。擬音語においては/N/が「ドアを開ける音ががちゃんと響く」のように音の響きや共鳴を表す。/N/は擬情語にも高い比率で出現するが、中でも感覚を表す語によく用いられる。

- (5) dokiN, doQkiN, gaRn, gaN-gaN, kiN-kiN, kyuN, kyuRN, piN, piRN, tsuN, tsuN-tsuN, tsuRN, ziN, ziN-ziN, zukiN, zukiN-zukiN

このような感覚を表す擬情語は、「頭ががんがんする」「胸がきゅんと痛くなった」「腰にずきんと痛みがきた」のように痛みを表す。この/N/は「痛みが響くようにはしる」を表し、擬音の「共鳴」という意味からメタファーという比喻によって拡張したものであると考えられる。/N/は擬態語に最も低い比率で出現する。語末に/N/を持つ擬態語は、「運河はどろんどろんとよどんで流れている」「白身をだらんと小皿に落とす」のように、ある物体の様態を表すものが多い。このような語の/N/は「柔軟性」「弾力性」を表すと指摘されている (Hamano 1986: 65)。

最後に、/ri/について検討する。/ri/は擬声語に起こらない傾向が明らかになったが、その理由の一つとしては次のことが考えられる。表1から見られるように、擬声語の8割は「かー」「ぎゃっ」「きゃんきゃん」のように1モーラの語基からなっている。ここで注意されたいのは、/ri/が1モーラの語基に起こらず、2モーラの語基だけに起こるということである。このことから擬声語では/ri/が起こる確率が極めて低くなるということが分かる。もう一つ理由としては、次のことが挙げられる。

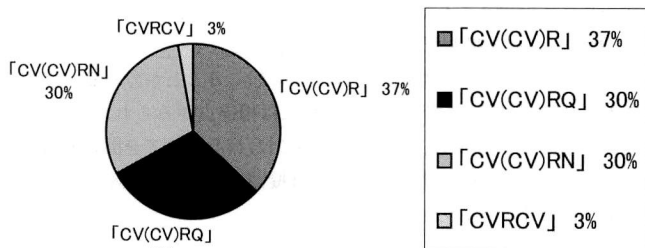
(6) とびらが {がちゃーっ／がちゃーん／＊がちゃーり} と音をたてて開いた。

(6)では「がちゃーっ」と「がちゃーん」が適格であるのに対し、「＊がちゃーり」が不適格である。それは、長音/R/の後ろに/Q/と/N/が起こることができるが、/ri/は起こらない。つまり、「CVCVRQ」「CVCVRN」などの形態が存在するのに対し、「＊CVCVRri」という形態が存在しない。このように考えると、長音/R/を高い比率で伴う擬声語では、/Q/・/N/の比率が上がるのに対し、/ri/の比率が下がることが分かる。

6. 長音/R/標識

本節では、長音/R/標識について論じる。本研究で扱っている1,591語のうち長音/R/を伴う語彙は187(12%)語が得られた。これらは「CV(CV)R」「CV(CV)RQ」「CV(CV)RN」「CVRVCV」のタイプに分けることができる。図2が示しているように、

図2 長音/R/を伴うオノマトペの百分比



「CV(CV)R」タイプのものが最も多く、37%に相当する69語が得られた。次に

「CV(CV)RN」「CV(CV)RQ」であり、いずれも 30%である。前者に 57 語、後者に 56 語があった。また、語中に長音が起こる「CVRCV」タイプはもっとも少数であり、5 語（3%）しか見られない。

/R/を伴うオノマトペについてはもう一つの特徴が明らかになった。それは、/R/を伴うオノマトペの大半が 1 モーラの語基であるということである。/R/を伴う 187 語のうち 161 語（86%）は「かーかー」「しーしー」「えーんえーん」「ぶーっ」「にーっ」のような 1 モーラの語基を持つものであるが、25 語（13%）は「かちゃーん」「ずどーん」「すらーっ」のような 2 モーラの語基を持つものである¹。

/R/は、以下の表 4 の割合で出現している。

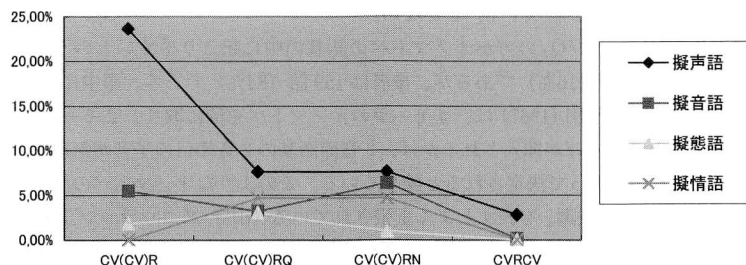
表 4 長音/R/を伴う語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
全語数	144	659	1,040	129
/R/	60 (42%)	100 (15%)	61 (6%)	12 (9%)

表 4 から、擬声語は/R/を伴う比率がもっとも高く 42%を占めており、これに対して擬態語は、逆に長音を伴わない傾向にあり、その比率が 6%である。

/R/を伴う「CV(CV)R」「CV(CV)RQ」「CV(CV)RN」「CVRCV」のタイプは下位類のオノマトペにおいては、図 3 が示しているように出現している。

図 3 長音/R/を伴う下位類のオノマトペ



擬声語には/R/を伴うすべてのタイプが観察されるが、その中では「CV(CV)R」が圧倒的に多い(34 語(24%))。擬音語の場合は、「CV(CV)RN」は 42 語(6%)、「CV(CV)R」は 36 語(5%)、「CV(CV)RQ」は 21 語(3%)である。擬態語は「CV(CV)RQ」は 32 語(3%)、「CV(CV)R」は 19 語(2%)、「CV(CV)RN」は 10 語(1%)である。また、擬情語には「CV(CV)RQ」と「CV(CV)RN」の 2 タイプしか見られず、いずれも 6 語(5%)である。

¹ 「擬声語」には「こけっこー」のような 1 モーラと 2 モーラにも属しない例外が見られる。

7. 語中に起こる促音/Q/・撥音/N/標識

本節では、2 モーラの語基の中に起こる促音/Q/と撥音/N/について検討する。

日本語オノマトペ 1,591 語のうち、語中に/Q/か/N/を持つオノマトペは 187 語 (12%)である。これらは形態的に次の「CVQCV」「CVNCV」「CVQCVN」「CVQCVri」「CVNCVri」のタイプに分類することができる。これらのタイプの割合を図4で示す。

図4 挿入辞を伴うオノマトペの百分比

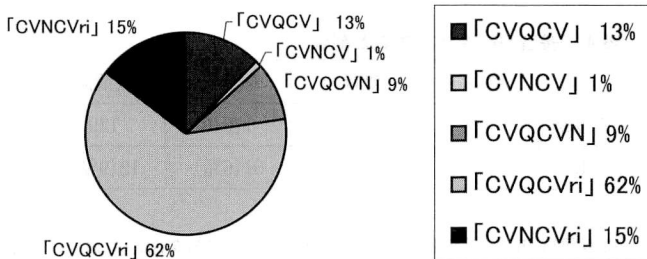


図4から明らかなように、語中に/Q/または/N/を持つオノマトペの中で、語中に/Q/、語末に/ri/を持つ「CVQCVri」タイプが最も多い。このようなタイプの語は62%に相当する110語が得られた。その次に「CVNCVri」であり、26語(15%)がみられた。「CVQCV」「CVQCVN」はそれぞれ22語(13%)と16語(9%)である。「CVNCV」が最も少数であり、2語(1%)しかない。

図4から、/N/より/Q/の方がオノマトペの語基の中に起こりやすいということである。前者は28語(16%)であるが、後者は159語(84%)である。語中に起こる/Q/と/N/について黒田(1967)は、4モーラのオノマトペを例に取り、2モーラ目に/Q/が挿入されるか/N/が挿入されるかは、2音節語基の2音節目の子音が無声であるか有聲であるかによって決定されると論じている。このようなオノマトペの語中に起こる/Q/と/N/は「強調」を表すとよく主張されている(田守・スコウラップ1999; 角岡2007)²。例えば、「{ぎくぎく/ぎくぎく}」と枯れた落ち葉を踏むから窺えるに、語中に/Q/を持つ形態と/Q/を持たない形態は意味的に同じものを指しているが、語中に/Q/を持つ「ぎくぎく」のほうが/Q/を持たない「ぎくぎく」よりもっと強調した言い方であると分かる。同じように、/N/についても言える。「涙が{じわり/じんわり}とわいてくる」では、語中に/N/を持つ語と/N/を持たない語は同じ意味を表すが、語中に/N/を持つ語の方が強調した言い方になる。

² 語中に起こる/Q/と/N/については次のような見解もある。Hamano (1986) は語中に起こる/Q/は「強調」を表すと認めているが、語中に起こる/N/については、「ぼんやり」「げんなり」を挙げながら、これらには「*ぼやり」「*げなり」といった、/N/を含まない対応形が存在しないので、この/N/は「強調」を表すと見なさない方がよさそうであると述べている。

語中に/Q/・/N/を持つものが下位類のオノマトペにはどの程度の頻度で出現するかを調査したその結果を表5にまとめる。

表5 語中に/Q/・/N/を持つ語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
全語数	144	659	1,040	129
/Q/・/N/	2(1%)	22(3%)	152(15%)	9(7%)

この表から窺えるように、擬声語・擬音語は語中の/Q/・/N/を伴わない傾向にある。その次に擬情語であり、7%を占める。一方、これに対して擬態語はもっとも多数であり、15%に相当する152語が観察される。ここでは、擬声語・擬音語・擬態語・擬情語においては、「CVQCV」「CVNCV」「CVQCVN」「CVQCVri」「CVNCVri」それぞれがどのように出現するかをみる。

図5 語中に/Q/・/N/を持つ下位類のオノマトペ

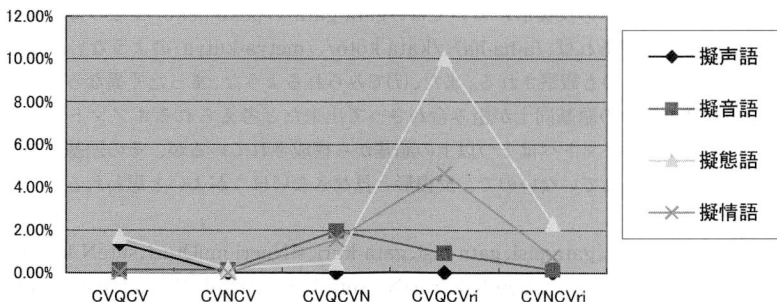


図5から、擬態語・擬情語においては、「CVQCVri」というタイプのものが最も多数であることが分かる。前者は104語(10%)、後者は6語(5%)である。その他に、擬態語には「CVNCVri」といったタイプのものも多数みられ24語(2%)が得られた。これと反対に、擬声語・擬音語は「CVQCVri」「CVNCVri」タイプのものが現れない傾向にある。

以上の結果から次のことが考えられる。図4から窺えるように、/Q/・/N/を持つオノマトペの中で「CVQCVri」と「CVNCVri」がもっとも多数である。これらの2つのタイプは語末に「ri」接尾辞を持つことで共通しているが、語基の中の/Q/と/N/で異なっている。両者の語数を合わせると128語(77%)になる。このような「CVQCVri」と「CVNCVri」タイプのもののほとんどが擬態語に出現する傾向があるため、擬態語の形態的特徴をなすと推測できる。

8. 反復

本節では、オノマトベにおける反復について検討する。先行研究では、オノマトベの反復は一般語彙に見られる反復と区別されており、オノマトベの特徴の一つであると指摘されている (Waida 1984; 田守・スコウラップ 1999; 角岡 2007 など)。

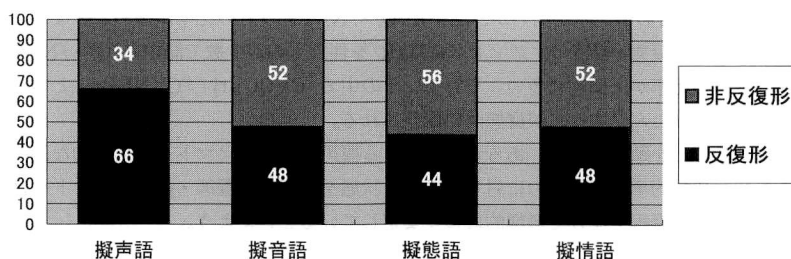
擬声語の「ははは」と擬態語の「ころころ」いずれも反復形であり、前者は「は」という1モーラの語基、後者は「ころ」という2モーラの語基の反復形である。反復は「国々」「人々」「黒々」のように一般語彙にも見られることから、オノマトベの特有のパターンではないという人がいるかもしれない。しかし、一般語彙の反復の意味は「複数」ないし「強調」であるのに対し、オノマトベの反復は、音や動作の「繰り返し」ないし「連続」を表すといわれている (田守・スコウラップ 1999: 30)。また、一般語彙とオノマトベの反復に関する相違点は、一般語彙は「人々」「山々」などのように、一回のみの反復が可能であるのに対し、オノマトベ語彙はそれ以上の反復した形態が許される。例えば「はははははと笑った」「ころころと転がった」などがそれである。

日本語オノマトベの反復形においては、/gata-gata/、/peko-peko/ などのような完全反復形のものであれば、/a-ha-ha/、/kata-koto/、/metya-kutya/ のようないわゆる不規則反復形のものも観察される。また、(7) でみられるような、まったく異なる1モーラないし2モーラの語基同士が組み合わさって出来たと考えられるオノマトベがある。このようなオノマトベは1つ以上の語基から構成されているが、その語基や語基の部分が繰り返されていないので、反復形と見なさないほうがよいと思われる。

- (7) doN-tyaN, gata-pisi, gata-bisi, gata-kuri, siNneri-muQturi, suteN-korori, suQteN-korori, suQteN-kororiN, suta-kora, tiN-doN, tigu-hagu, tuR-kaR, tyoko-maka

日本語オノマトベを考察した結果、1,591 語の 46% に相当する 735 語が反復形ということが明らかになった。得られた結果を以下の図 6 にまとめる。

図 6 日本語オノマトペの反復形



擬声語を除いて日本語オノマトペの反復の割合は5割に到っていないということが注目を値する。反復はある音や動作の「繰り返し」ないし「連続」を表すと言われているが、このように考えると、どの語の形式も反復することが可能になる。例えば一度限りの「ころん」「ばたり」等の語が反復すると「ころんころん」「ばたりばたり」のようになる。論理上、反復形の割合は丁度5割になるはずであろう。日本語オノマトペの反復形の割合が5割に至っていない解釈の一つとしては、語末に長音と促音を持つ「CVRQ」「CVCVQRQ」型や「CVNVCVri」型の語基が通常反復しないからだと考えられる。例えば、「おぎゃーっ」「じわーっ」「ぼやーっ」等に対して反復形の「*おぎゃーっおぎゃーっ」「*じわーっじわーっ」「*ぼやーっぼやーっ」などは存在しない。また、(8)から窺えるように、「CVNVCVri」型の「にんまり」「のんびり」は反復すると、適格性の許容度が下がる。

- (8) a. 返された答案の点がいいらしく、彼は{にんまり／?にんまりにんまり} 笑って眺めていた。
 b. 男の子が3人もいると {のんびり／?のんびりのんびり} テレビも見えて いられません。

擬声語に反復形が多いことは、擬声語は「ひひひ」「けけけ」「えんえん」のように人間の笑い声や泣き声などを表すことが多いからであろう。つまり、人間の笑い声や泣き声は連続する発声であるため、「*ひとつと笑った」「*けっと笑った」「*えんと泣いた」という一度限りのものが成り立たないのである。

9. 終わりに

本研究では、日本語オノマトペを擬声語・擬音語・擬態語・擬情語に分類した。擬声語・擬音語がある音を模倣して出来上がる語彙であるのに対し、擬態語・擬情語は様子・状態を描写する語彙であるということである。本稿では、これらオノマトペの派生過程における/Q/・/N/・/ri/・/R/標識がどのように出現するのかを考察した結果、複数の相違点があることが明らかになった。

ここでは大きな相違点としては次のことが挙げられる。擬声・擬音のオノマトペには/R/を伴うものの比率が高いが、語中に/Q/・/N/を伴うものの比率が極めて少ない。これに対し、擬態・擬情のオノマトペには/R/を伴うものが少数で語中に/Q/・/N/を伴うものの比率が圧倒的に多い。そして、その中で「CVQCVri」「CVNVCVri」といったタイプのほとんどすべてが擬態語に観察される。

以上のことを踏まえると、ある音を模倣する擬声・擬音オノマトペが形態的な面からみて、比較的単純であるのに対し、様子・状態を描写する擬態・擬情オノマトペはより多く派生過程を受けて形態的により安定しているといえよう。

参考文献

- Chang, Andrew C. (2000) 『〈和英〉擬態語・擬音語分類用法辞典』 「A Thesaurus of Japanese Mimesis and Onomatopoeia: Usage by categories」 大修館書店
- Hamano, Shoko (1986) *The Sound - Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kuroshio.
- Hamano, Shoko (1994) Palatalization in Japanese sound symbolism. In *Sound symbolism*. Leanne Hinton, Johanna Nichols, John J. Ohala. University of California at Berkeley. Cambridge University Press.
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版
- 角岡賢一 (2003) 「日本語オノマトペ語基の多義性について」 『龍谷大学国際センター研究年報』 12.
- 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』 くろしお出版
- Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, and Lawrence Schourup (eds.). (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese* (Trends in Linguistics. Documentation 12). Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- 黒田成幸 (1967) 「促音および撥音について」 『言語研究』 50.
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ：形態と意味』 くろしお出版
- Waida, Toshiko (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures. In *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*. Vol. 36.

(さでいぐる えんどす・北海道大学大学院博士後期課程)